

高等学 校

令和6年度

教育研究員研究報告書

公 民

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	3
III	研究の仮説	4
IV	研究の方法	4
V	研究構想図	5
VI	研究の内容	6
VII	研究の成果	15
VIII	今後の課題	16

研究主題

現代の諸課題の解決に向け、社会的な見方・考え方を働かせ、社会 参画しようとする態度を育成する授業改善

～課題に当事者意識をもち、対立やジレンマに折り合いをつけ、
新たな価値を創造できる市民の育成を目指して～

I 研究主題設定の理由

1 公民科で育成すべき資質・能力

高等学校学習指導要領公民科の目標は、「社会的な見方・考え方を働かせ、現代の諸課題を追究したり解決したりする活動を通して」、「平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」の育成を目指すとしている。

一方、「OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」(経済協力開発機構 令和元年5月)では、「よりよい未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー(transformative competencies)」として、(1)「新たな価値を創造する力(creating new value)」、(2)「責任ある行動をとる力(taking responsibility)」、(3)「対立やジレンマに対処する力(reconciling tensions and dilemmas)」の三つの複合的なコンピテンシーを提示しており、これらのコンピテンシーを発揮することで未来を形作っていくことを目指している。また、「生徒エージェンシー」¹をラーニング・コンパスの根幹をなす概念に位置付けており、「生徒が社会に参画し、人々、事象及び状況をよりよい方向へ進めようとする上で責任を担うという感覚」として、個人から社会、世界、地球へと同心円にグローバルに広がっていくウェル・ビーイングに責任を負う主体性の重要性を示している。

以上のことから、本研究で目指すべき資質・能力を次のように設定した。

- ① 事実を基に概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、解決に向けて公正に判断したりする力
- ② 合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力
- ③ よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度

2 生徒の現状と課題

研究主題を設定するに当たり、研究員所属校の在籍生徒の現状と課題を基に協議を行った。協議では、第一に「社会課題を考察する際、学校生活を中心に捉える傾向があり、多面的・多角的な視点が十分ではない」、第二に「社会課題を、自分だけでは解決できないものとして、他人ごとと捉える傾向がある」、第三に「課題解決に向けて主体的に行動することができない、あるいは、行動することをあきらめてしまうことがある」という生徒の現状が挙げられた。このことは、様々な調査にも表れている。

「高校生社会参加に関する意識調査報告書-日本・米国・中国・韓国の比較-」(国立青少

¹ 生徒が目的意識を働かせ、自分自身の責任を果たしながら、周囲の人々、事象、状況をより良くするために学んでいくための力。自分の人生および周りの世界に対して良い方向に影響を与える能力や意志をもつこと。「令和2年度文部科学省委託事業 報告書『グローバルな人材育成に資する国際協働型プロジェクト学習の効果に関する調査研究』」(日本イノベーション教育ネットワーク 令和2年3月)

年教育振興機構 令和3年6月)では、学校外の活動の参加経験に関する調査において、「地域の子ども・若者の交流活動」など、例示された11項目中10項目²で「最近1年間、学校外で参加したことがある」と回答した者の割合が、4か国の中で、日本の高校生が最も低い結果であったことが示されている。

また、「18歳意識調査 第62回-国や社会に対する意識(6カ国調査)-報告書」(日本財団2024年4月3日)では、「自分の行動で、国や社会を変えられると思うか」という質問に対する肯定的な回答は、日本は45.8%で、6か国中最も低い結果(アメリカ65.6%、イギリス56.1%、中国83.7%、韓国60.8%、インド80.6%)であることが示されている。

以上のことを踏まえ、本研究では生徒の現状と課題を以下のように整理した。

【現状】

- ア 課題について考察する際、自らの経験則から判断をする傾向があり、事実や概念を活用する力が十分に身に付いていない。
- イ 課題についての当事者意識が薄く、合意形成や社会参画を視野に入れながら議論する力が十分に身に付いていない。
- ウ 互いの価値観を認め合いながら、粘り強く現代の諸課題と向き合い、解決しようとする態度が十分に身に付いていない。

【課題】

- ア 社会的な見方・考え方を働かせ、事実を基に概念などを活用しながら考察したり判断したりする学びが必要である。
- イ 対立やジレンマが生じる現代の諸課題に当事者意識をもち、考えたことを説明・議論する学びが必要である。
- ウ 社会をよりよくしようとする態度を育成するような協働的な学びの充実が必要である。

3 主題設定

「OECD Education 2030 プロジェクト ポジションペーパー」(OECD 平成30年)によると、エージェンシーは、「社会参画を通じて人々や物事、環境がよりよいものとなるように影響を与えるという責任感をもっていることを含意する。」また、「エージェンシーの発揮を可能としていくためには、教育者は学習者の個性を認めるだけではなく、例えば、教師や仲間たち、家族、コミュニティなど、彼らの学習に影響を与えているより幅広い関係性を認識する必要がある。」としている。

このことを踏まえ、本研究では、生徒が「よりよい社会」の創り手になるには、社会における現代の諸課題に目を向け、自分の判断基準をもち、正しいと思うことを多様な人となつながら成し遂げていく姿勢を育成することが重要であると考えた。また、「よりよい社会」を考える際には、「幸福」や「正義」、「公正」などの社会的な見方・考え方を働かせ、社会における現代の諸課題を通じて対立やジレンマが生じる課題に当事者意識をもたせる工夫が必要である。さらに、生徒が多様な価値観に触れながら、異なる立場に立って考えたことを説明したり議論したりする中で、社会をよりよくしようとする態度や主体的な社会参画に向け

² a. 趣味に関する活動(文化・アート・音楽・スポーツを含む)、b. 地域の子ども・若者の交流活動(子ども会など)、c. 寄付・募金活動、d. 環境・自然保護に関する活動、e. 動物愛護に関する活動、f. 社会福祉に関する活動、g. 町おこしや郷土芸能に関する活動、h. 災害に関する活動、i. 国際協力・交流に関する活動、j. 政策に対する意見表明に関する活動、k. アルバイトや仕事、のうち「k. アルバイトや仕事」(米国に次いで2番目に高い)を除く10項目

た態度が育成されると考えた。

以上のことから、研究主題を「現代の諸課題の解決に向け、社会的な見方・考え方を働かせ、社会参画しようとする態度を育成する授業改善～課題に当事者意識をもち、対立やジレンマに折り合いをつけ、新たな価値を創造できる市民の育成を目指して～」とした。

II 研究の視点

1 全ての生徒の資質・能力を育成するために

「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」(文部科学省初等中等教育局教育課程課 令和3年3月)では、「個別最適な学び」については、生徒が自己調整しながら学習を進めていくことの重要性が指摘されている。また、「協働的な学び」については、探究的な学習や体験活動などを通じ、生徒同士で、あるいは地域をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重することが示されている。授業においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素を組み合わせ、「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、さらにその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切だと記されている。

2 「社会参画」について

本研究では、研究主題の検証のため、「高校生の社会参画意識と家庭科の教育要因との関連について」(日本家庭科教育学会誌 第55巻第2号 平成24年8月)における「高校生の社会参画意識項目の因子分析」を基に尺度の一部改変を行って以下の社会参画に関するアンケートを作成し、検証授業の単元の前後に実施して生徒の社会参画の意欲や効力感を測った。

社会参画に関するアンケート

【社会参画への意欲】

- 1 社会と関わりたい
- 2 社会参画に興味がある
- 3 自分は、未来の社会をかたち作る責任を強く感じる

【社会参画への効力感】

- 4 人の役に立ちたい
 - 5 高校生でも社会をよくしていけると思う
 - 6 地域住民の意識が地域をよくしていけると思う
- (5：そう思う 4：どちらかといえばそう思う 3：どちらともいえない
2：どちらかといえばそう思わない 1：そう思わない)

上述の研究によると、社会参画意識を育む教育は、教科での学習(家庭科)において今まで個人的に行われることの多かった調べ学習や問題解決学習を協働学習と組み合わせることで、社会参画意識を効果的に育むことができると考察している。「人との交流への関心」の因子は、社会参画意識の育成につながっており、「高校生が人と交流することへの関心を促すこと」で、社会参画意識も高めることができるとする。また、参加型の学習、体験、問題解決学習、調べ学習など、人との関わりの中で学習する環境作りに努めることが、社会参画意識の形成の支援に有効であるとしている。

Ⅲ 研究の仮説

「Ⅱ 研究の視点」を踏まえ、本研究における仮説を次のように設定した。

仮説 1 生徒のそれまでの経験や学習到達度等に応じて、事実を基に概念などを活用する場面を設定することで、多面的・多角的に課題を考察し、解決に向けて公正に判断する力を育成することができる。

仮説 2 現代の諸課題に当事者意識をもち、創造力を働かせる場面を設定することで、説明・議論する力や対立やジレンマに折り合いをつける力を育成することができる。

仮説 3 多様な価値観に共感したり、学んだことや考えたことを表現したりする場面を設定することで、主体的に課題を解決し、社会をよりよくするために責任ある行動をとろうとする態度を育成することができる。

Ⅳ 研究の方法

1 具体的方策

次の（１）から（３）の活動を含む指導計画を立案する。また、単元の前後で生徒の社会参画に関するアンケートを、一人1台端末を活用して実施し、指導の効果を検証する。

- (1) 学習履歴を活用し、生徒が自己調整しながら学習を進めるとともに、幸福・正義・公正といった概念を使って主題を考察・探究する場面を取り入れる。
- (2) 生徒が現代の諸課題に当事者意識をもち、議論する工夫として、外部機関との連携やロールプレイ等を活用して個人や企業、国家などの様々な視点に立ち、政策提言など意見を表現する活動を取り入れる。
- (3) 異年齢等の生徒など意見や立場が異なる他者との対話を通じて、多様な価値観に触れながら、よりよい社会の実現に向けて社会参画の在り方を考察する協働的な学びの機会を設ける。

2 検証方法

生徒が学習履歴を活用し、自己調整しながら協働的な学びとなるよう工夫を行い、次のルーブリックを活用してワークシート等の成果物の評価やアンケート結果を分析することにより、本研究の主題である社会参画しようとする態度を育成する授業改善がなされたかを検証する。

評価規準	A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C（努力を要する）
多面的・多角的に課題を考察し、解決に向けて公正に判断している。	事実を基に概念などを活用して多面的・多角的に考察し、公正に判断ができています。	事実を基に概念などを活用して考察・判断ができています。	事実を基に概念などを活用して考察・判断ができていない。
現代の諸課題に対して当事者意識をもち、説明・議論する力や対立やジレンマに折り合いをつける力を育成している。	対立やジレンマに折り合いをつけ、新たな価値を創造することができています。	対立やジレンマに折り合いをつけることができています。	対立やジレンマに折り合いをつけることができていない。
主体的に課題を解決し、社会をよりよくするために責任ある行動をとろうとする態度を育成している。	多様な価値観に共感し、社会をよりよくするために責任ある行動をとろうとすることができています。	多様な価値観に共感し、責任ある行動をとろうとすることができています。	多様な価値観に共感し、責任ある行動をとろうとすることができていない。

V 研究構想図



VI 研究の内容

1 実践事例Ⅰ 公共

教科名	公民科	科目名	公共	学年	第1学年
-----	-----	-----	----	----	------

(1) 単元名、使用教材

- ア 単元名 国際社会の変化と日本の役割
- イ 使用教材 教科書、ワークシート

(2) 単元の目標

- ・ 国際貢献を含む国際社会における我が国の役割などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、よりよい社会は、憲法の下、個人が議論に参加し、意見や利害の対立状況を調整して合意を形成することなどを通して築かれるものであることについて理解する。
- ・ 現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付ける。
- ・ 法、政治及び経済などの側面を関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、論拠をもって表現する。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・ 政治参加と公正な世論の形成、地方自治、国家主権、領土（領海、領空を含む。）、我が国の安全保障と防衛、国際貢献を含む国際社会における我が国の役割などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、よりよい社会は、憲法の下、個人が議論に参加し、意見や利害の対立状況を調整して合意を形成することなどを通して築かれるものであることについて理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 法、政治及び経済などの側面を関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、論拠をもって表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現実社会の諸課題について、よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（5時間扱い）

○「評定に用いる評価」 ●「学習改善につなげる評価」

次	主な学習活動	評価の観点			評価規準等 (評価方法等)
		ア	イ	ウ	
第一次 1時間	【単元を貫く問い】国際平和と人類の福祉のために、私たちはどのように対応していけばよいのだろうか。				
	【第一次のねらい】国際社会の特質や領土問題を基に、国家の定義について多面的・多角的に考察させ、国際政治の概要について理解させる。				
	【第一次の問い】国際社会における国家とは何だろうか。 ・「社会参画に関するアンケート」を実施する。 ・事例を基に、国際問題の現状について検討しながら、国家の定義について確認する。 ・領土問題について考察しながら、理想主義と現実主義の考え方をを用いて、国際政治の概要について理解する。	○			●【単元を貫く問い】の解決に向けて、問いに対する答えを予想したり、解決すべき疑問を挙げたりするなど、解決への見通しを立てている。(ワークシート、観察) ○国際政治の概要について理解している。(ワークシートの記述)
第二次	【第二次のねらい】国際連合をはじめとする国際機構の役割について、安全保障理事会の常任理事国のみが有している拒否権を通して理解を深めさせる。				

第二次 1時間	【第二次の問い】なぜ常任理事国のみが拒否権を有しているだろうか。	○	●	○勢力均衡方式と集団安全保障体制を対比しながら、集団安全保障体制について確認するとともに国際連盟と国際連合の違いについて理解する。 ●安全保障理事会の常任理事国について考察し、発表をする。	○勢力均衡方式と集団安全保障体制を対比しながら、集団安全保障体制について理解している。(ワークシートの記述) ●安全保障理事会の常任理事国について考察し、発表している。(ワークシートの記述、観察)
	・勢力均衡方式と集団安全保障体制を対比しながら、集団安全保障体制について確認するとともに国際連盟と国際連合の違いについて理解する。 ・安全保障理事会の常任理事国のみがなぜ拒否権を有しているのかについて考察し、発表をする。				
第三次 1時間(本時)	【第三次のねらい】国際平和と人類の福祉に寄与する先進国の役割について多面的・多角的に考察、構想、表現させる。また国際貢献の在り方について、人道的介入の問題を通して理解を深めさせる。	●	●	○人道的介入について、正義の概念を活用しながら考察する。 ●X国(軍事政権)、X国(一般市民)、X国隣国(発展途上国)、周辺国(東南アジアの国々)、日本、国連の6グループに分かれて、自分たちの主張について考察しながら、人道的介入の是非について考察したり構想したり、論拠をもって表現する。	●正義に着目して、人道的介入の是非、先進国の役割などを多面的・多角的に考察、構想、表現している。(ワークシート、観察) ●自らの立場の考えを述べるとともに、他者の意見を聞くことを通して、対立する考えを調整しようとしている。(観察)
	【第三次の問い】正義の武力介入はあるのか。				
第四次 1時間	【第四次のねらい】安全保障上の危機について多面的・多角的に考察、表現させる。また国際協調の重要性について考察させる。	●	○	○国際連合の歴史を振り返り、安全保障上の危機をどのように乗り越えてきたかについて確認をする。 ●「平和のための結集決議」が拒否権乱用から導き出されたことや冷戦後の地域紛争や民族紛争が増加した対応として、人間の安全保障の概念や予防外交の考えが高まってきたことなどを紹介し、今後、安全保障上の危機が起きた場合、人類はどのように対応するかについて検討・構想する。 ●検討・構想したものを、レポートにまとめる。	●安全保障の在り方について、検討・構想している。(ワークシート、観察) ○正義に着目して、国際連合の役割や国際協調の役割などを多面的・多角的に考察、構想している。(ワークシート、レポート)
	【第四次の問い】安全保障上の危機に人類はどのように対応すべきか。				
第五次 1時間	【第五次のねらい】国際社会において果たすことが求められる国連の役割について、予防外交や人間の安全保障などの考えを参考に、多面的・多角的に考察、構想させる。	○	○	○国際紛争解決の方法を国連憲章6章および7章から確認する。 ●SDGsと人間の安全保障の考えから予防外交について考察させるとともに、国連の果たすべき役割について構想・発表する。 ●「社会参画に関するアンケート」を実施する。	○よりよい社会の実現を視野に、現代の諸課題を主体的に解決しようとしている。(ワークシート、レポート、観察)
	【第五次の問い】国際社会において果たすことが求められる国連の役割とは何だろうか。				

(5) 本時 (全5時間中3時間目)

ア 本時の目標

人道的介入の事例を通して、意見や利害の対立状況を調整したり、合意形成や社会参画を視野に入れながら、概念を基に協働して考察したり構想したり、論拠をもって表現したりすることができるようにする。

イ 本時の展開

○「評定に用いる評価」 ●「学習改善につなげる評価」

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法等)
導入 5分	・本時の目標及び主題(正義の武力介入はあるのか)について確認する。	・国連総会決議2625(友好関係原則宣言)を、ナチスのユダヤ人虐殺と関連付けて紹介する。	
展開① 15分	・【ワーク1】事例を読み、人道的介入について(強く賛成/まあ賛成/賛成できない)のいずれかを選択し、その理由を考える。 ・【ワーク2】事例を参考にし、自分にとっての「正義」とは何かについてワークシートに記	・人道的介入について、現在の自分の考えで意見を書くように指示する。 ・寄付の実験(ゲーム理論)を紹介し、社会的ジレン	●正義に着目して、人道的介入の是非について、多面的・多角的に考察、構想、表現している。(ワークシート)

	載する。 ・【ワーク3】X国（軍事政権）、X国（一般市民）、X国隣国（発展途上国）、周辺国（東南アジアの国々）、日本、国連の6グループに分かれて、自分たちの主張について考察する。	マについて紹介する。 ・各グループに助言プリントを配布し、各立場の本音を紹介する。	
展開② 25分	・【ワーク4】六つの立場を一つの班にして、X国への人道的介入について、それぞれの立場でロールプレイ（議論）を行う。	・なぜ協力が望ましいことが分かっているのに、非協力を選んでしまったのかについて考えさせる。	●自らの立場の考えを述べるとともに、他者の意見を聞くことを通して、対立する考えを調整しようとしていることができる。（観察）
まとめ 5分	・人道的介入の是非を通して、対立する考えにどのように折り合いをつけ、この問題を解決しようとしたかを確認する。	・「保護する責任」や「国益」の考え方を提示し、複数の視点から考察できるように助言をする。	

(6) 単元の振り返り

ア 検証結果～ルーブリックによる評価の分析～

評価規準（n=118）	A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C（努力を要する）
公正に判断している	21人（18%）	67人（5%）	30人（25%）
当事者意識をもつ等	41人（35%）	59人（50%）	18人（15%）
社会をよりよくする態度	99人（15%）	9人（8%）	10人（8%）

※ 評価規準及び評価規準の項目については、「IV 研究の方法 2 検証方法」を参照

イ 成果

単元の内容が、国際機構の役割や安全保障に関するもので生徒にとってはあまり身近な話題とは言えなかったが、現代の諸課題に対して当事者意識をもち、創造力を働かせる場面を設定することにより、説明・議論する力や対立やジレンマに折り合いをつける力を育成することができた。また、学んだことや考えたことを表現する場面を設定することで、主体的に課題を解決しようとする態度の育成にもつながった。このことは、検証結果におけるおおむね満足できる以上の割合から捉えることができる。

本時では、仮説2及び研究方法2を踏まえた実践授業を行った。生徒のレポートには次のような記述が見られるなど、ロールプレイの手法を用いることで、対立する課題について当事者の立場に立つことができ、また異なる立場の者と議論し合うことで、課題を乗り越える解決策を導き出すきっかけになったことが伺える。

○授業後のレポートに見られた記述（例）

- ・それぞれの正義があって、どちらが悪いかわからないと軍事政権側の立場になって思いました。最初、私は、（軍事政権が）悪いと思っていたけれど、軍事政権側にも事情があるのかもしれない。今回の話し合いでそう感じました。
- ・介入がどれだけ正義に基づいていても、その手段や結果が倫理的であるかどうかは別問題である。
- ・人道的介入は、正義を追求しつつ外交的手段や国際協力を通じて行われるべき。
- ・人道的介入は他国が行うよりも、国連が行う方が効果的。

授業内の議論により、生徒は、対立やジレンマに折り合いをつけ、課題の解決に向けて新たな価値を見いだそうとしていると考えられる。

ウ 課題

検証結果から、事実を基に概念などを活用して考察・判断ができていない生徒の割合が全体の25%となった。課題について考察する際、自らの経験則を基に判断する傾向から脱却することに課題が残る。

国際紛争に代表されるような複雑な課題を扱い、授業のねらいを達成するためには、身近な課題のワークを入れるなど、生徒が自身の関わり方を考える場面を段階的に設定し、つなげていく必要がある。

2 実践事例Ⅱ 倫理

教科名	公民科	科目名	倫理	学年	第2・3学年
-----	-----	-----	----	----	--------

(1) 単元名、使用教材

- ア 単元名 福祉の向上と倫理的課題
- イ 使用教材 教科書、ワークシート

(2) 単元の目標

- ・ 人権や福祉について倫理的課題を見だし、その解決に向けて倫理に関する概念や理論などを手掛かりとして多面的・多角的に考察し、公正に判断して構想し、自分の考えを説明し、論述する。
- ・ 人権や福祉について倫理的課題を見だし、当事者意識をもち、主体的に課題を解決し、社会をよりよくするために責任ある行動をとろうとする態度を養う。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
	・人権や福祉について倫理的課題を見だし、その解決に向けて倫理に関する概念や理論などを手掛かりとして多面的・多角的に考察し、公正に判断して構想し、自分の考えを説明し、論述している。	・人権や福祉について倫理的課題を見だし、当事者意識をもち、主体的に課題を解決し、社会をよりよくするために責任ある行動をとろうとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（6時間扱い）

○「評定に用いる評価（総括的評価）」 ●「学習改善につなげる評価（形成的評価）」

次	主な学習活動	評価の観点			評価規準等 (評価方法等)
		ア	イ	ウ	
第 一 次 3 時 間 (本 時 は 、 1 時 間 目)	【単元を貫く問い】現代の人権課題や福祉の課題に対して、私たちは何ができるだろうか。				
	【第一次のねらい】様々な他者との協働・共生に向けて、現代社会において様々な人権に関する課題があることを確認し、グループで協働して課題を探究させ、社会の一員として何ができるか見通しをもたせる。				
	【第一次の問い】現代における人権課題に対して、私たちは何ができるだろうか。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・「社会参画に関するアンケート」を実施する。 ・日本の人権課題についてペアワークで確認する。 ・人権課題を考える際の必要な考え方として、ロールズの「無知のヴェール」及び公平の考え方について考察する。 ・東京都総務局人権部ホームページ内の「東京都の人権課題」にアクセスして人権課題を確認し、自分の興味・関心のあるテーマを選択する。 ・同じテーマを選んだ生徒同士でグループとなり、テーマ内の具体的な課題を決め、生徒一人1台端末などを用いて必要な情報を収集・整理し、悩みを抱える当事者の気持ちを想像しながら、課題解決の方法や、自分でどのように社会参画するか考察する。 ・グループ内で探究した内容について、プレゼンテーションソフトを活用して、社会の一員として自らどのように課題解決に携わるかという視点も含めて、発表する。 		●	●	<ul style="list-style-type: none"> ●対話を通じて、人権課題の解決への見通しを立てている。(発言) ●現代社会の人権課題を理解するために、ロールズの思想について考察している。(ワークシートの記述)
			○		○グループでの議論を通して、人権課題について多面的・多角的に考察し、構想している。(ワークシートの記述)
			○		○グループで協働して探究した人権課題について、何ができるかという視点を含めて発表している。(ワークシートの記述・発表スライド)

第二次 3時間	【第二次のねらい】多様性を前提とした共生社会の実現における課題解決に向け、どのように社会参画すべきか構想させる。		
	【第二次の問い】現代における福祉の課題に対して、私たちは何ができるだろうか。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会における共生について、ペアワークで確認する。 ・核家族化や少子高齢化の進行と、地域社会の関係について確認する。 ・社会的な福祉を充実させるために必要なことを、ケアや共生の視点から考察し、生徒一人1台端末などを用いて必要な情報を収集し、整理し、課題解決の方法や、自分でどのように社会参画するかをグループで探究する。 ・グループ内で探究した内容について、プレゼンテーションソフトを活用して、社会の一員として自らどのように課題解決に携わるかという視点も含めて、発表する。 ・「社会参画に関するアンケート」を実施する。 	○	<ul style="list-style-type: none"> ● 対話を通じて、地域社会における共生に関する課題の解決への見通しを立てている。(発言) ○ グループでの議論を通して、地域社会の課題について考察している。(ワークシートの記述) ○ 地域共生社会の在り方について、倫理に関する概念や理論などを手掛かりとして、見いだした課題について、社会参画の視点から、主体的に解決しようとしている。(ワークシートの記述・発表スライド)

(5) 本時 (全6時間中1時間目)

ア 本時の目標

- ・人権に関する諸課題を考える手掛かりとして、ロールズ思想について考察する。
- ・人権に関する現代の諸課題について、自らテーマを選択し、異年齢の生徒との議論を通じて多様な価値観に触れながら共に学ぼうとする態度を養う。

イ 本時の展開

○「評定に用いる評価」 ●「学習改善につなげる評価」

	・主な学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法等)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標及び授業の進め方について確認する。 ・日本における人権課題について、ペアワークで確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人権課題に関するロールプレイを通して人権課題を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 対話を通じて、人権課題の解決への見通しを立てている。(発言)
展開 40分	<ul style="list-style-type: none"> ・人権課題を考える際の必要な考え方として、ロールズの「無知のヴェール」及び公平の考え方について考察する。 【ワーク1】 ・「人権教育プログラム」に記載のある下記テーマから興味・関心のあるものを選択する。 (女性、子供、高齢者、障がい者、同和問題、アイヌの人々、外国人、HIV感染者、ハンセン病患者、犯罪被害者や家族、インターネットによる人権侵害、北朝鮮による拉致問題、性自認・性的志向、路上生活者) 【ワーク2】 ・自分自身で興味・関心のある具体的な課題について調べる。 ・異年齢でグループを編成し、自ら興味・関心あるテーマについて理由や経緯を共有し、意見交換する。 ・グループを適宜移動して他の生徒たちと意見交換することで、多様な価値観に触れる。 【ワーク3】 ・ワーク2で可視化した各テーマの具体的な課題の中から、探究する課題の一つを決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・野球観戦のイラストを用いて、公平の考え方について視覚的に理解させる。 ・詳細を知りたい生徒に対しては、「東京都総務局人権部」HPのサイトを閲覧させて、基本的な課題が何かを把握させる。 ・異年齢生徒や外国籍の生徒等がない場合、関連する新聞記事や公的機関のHPなどを通じて様々な価値観に触れるようにするとともに、複数の探究方法を示すことで、個別最適な学びを確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現代社会の人権課題を理解するために、ロールズの考え方について考察している。(ワークシートの記述)
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の進捗状況をグループごとに確認する。 		

(6) 単元の振り返り

ア 検証結果～ループリックによる評価の分析～

評価規準 (n=15)	A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
公正に判断している	7人 (47%)	8人 (53%)	0人 (0%)
当事者意識をもつ等	11人 (73%)	4人 (27%)	0人 (0%)
社会をより良くする態度	7人 (47%)	8人 (53%)	0人 (0%)

※ 評価規準及び評価規準の項目については、「IV 研究の方法 2 検証方法」を参照
イ 成果

検証授業を実施した高校における「倫理」は、複数学年が登録できる選択科目であり、異年齢の生徒でグループを編成することが可能である。少人数授業の利点を生かして、心理的安全性が保たれた環境の中で、議論が活発化できたことが検証結果にも反映された。本単元において、履修する全ての生徒の資質・能力がおおむね満足できる以上となった。

仮説3及び研究方法3を踏まえた本時では、個人で調べたり考えたりしたことをグループで共有する場面を設定し、多様な価値観に共感する機会を通じて、主体的に課題を解決し、社会をよりよくするために責任ある行動をとろうとする態度の育成を目指した。生徒は自ら選択したテーマに関する具体的な人権課題について、先輩から後輩へのアドバイスや、後輩から先輩への質問など、様々なコミュニケーションを通じて価値観の共有を図るなど、意欲的に探究活動に取り組み、社会の一員として、課題解決に向けた具体的な方法について検討していた。活動の様子や、次のようなワークシートの記述から、互いの価値観を共有・共感し、現代の人権課題について自らの社会参画の方法を含めて検討・議論することができていたと考えられる。

○ワークシートに見られた記述 (例)

- ・生まれてきた以上、人間はみんな平等で同じ位置にいる。誰かを下に見たり、否定したりする言葉や行動は絶対にしてはいけないと思った。(外国人の人権問題)
- ・「無知のヴェール」から犯罪被害者の立場を考えると、心に傷を負うだけでなく経済的な負担やこの先の人生の安全が保障されないことに気付いた。情報にアンテナを張り、自分の意見を育み、選挙を通じて自分の考えにあった候補者を支持する。(犯罪被害者の人権)
- ・積極的に当事者に関わり、少しでも当事者の心の支えになる。
- ・困っている人たちを見たら行動して助ける。
- ・孤立している人をつくらない。
- ・新しいコミュニティを増やす。

以上のことから、自ら調べた人権課題について、他者と共有するとともに、考えや思いを伝え合うことを通して、自らの社会参画への意欲を高めたと考える。

ウ 課題

ワークシートの記述に「当事者の話を聞いてあげることしかできない」というものがあり、長い年月を経て形成された人権課題という社会的に重要なテーマと向き合ったことで、社会に対する自己効力感が低下した可能性も否定できない。

生徒には、当事者の気持ちに寄り添い共感することも社会参画につながると伝えるとともに、現代社会の問題に生徒を向き合わせ、社会参画の具体的な事例やそれによって成果を上げている事例などを適宜紹介し、多様な価値観を受け入れながら、よりよい社会の実現に向けて主体的に行動する資質・能力を一層育成していく必要がある。

3 実践事例Ⅲ 政治・経済

教科名	公民科	科目名	政治・経済	学年	第3学年
-----	-----	-----	-------	----	------

(1) 単元名、使用教材

- ア 単元名 現代政治の課題
- イ 使用教材 教科書、資料集、ワークシート

(2) 単元の目標

- ・ 社会の在り方に関わる現実社会の諸課題の解決に向けて探究するための手掛かりとなる概念や理論などについて理解するとともに、諸資料から、社会の在り方に関わる情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- ・ 国家及び社会の形成者として必要な選択・判断の基準となる考え方や政治・経済に関する概念や理論などを活用して、政党政治や選挙などの観点から、望ましい政治の在り方及び主権者としての政治参加の在り方について、公正に判断して、合意形成や社会参画に向かう力を養う。
- ・ よりよい社会の実現のために現実社会の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養う。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・現代日本の政治・経済に関する諸資料から、課題解決に必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取っている。	・政党政治や選挙などの観点から、望ましい政治の在り方及び主権者としての政治参加の在り方について多面的・多角的に考察、構想し、表現している。	・主権者として政治に対する関心を高め、様々な機会を通じて粘り強く主体的に社会に参画しようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (6時間扱い)

○「評定に用いる評価」 ●「学習改善につなげる評価」

次	主な学習活動	評価の観点			評価規準等 (評価方法等)
		ア	イ	ウ	
第一 次 2 時 間	【単元を貫く問い】望ましい政治や主権者としての政治参加の在り方とはどのようなものだろうか。				
	【第一次のねらい】現代の日本の政治における問題に関する諸資料を通じて、政党政治の特徴と課題についてまとめ、望ましい政治の在り方について考察させる。				
	【第一次の問い】望ましい政治の在り方とはどのようなものだろうか。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・「社会参画に関するアンケート」を実施する。 ・最新の時事問題として、政治資金規正法の改正について取り上げ、問題の概要と論点について複数のニュースメディアを使って確認する。 ・政治資金規正法の目的や内容、政党交付金の意義等について、教科書・資料集等を活用してまとめる。 ・政党が議会制民主主義の運営上欠くことのできないものであることを確認し、これまでの政党政治の変遷から政党政治が抱える課題についてまとめ、これからの望ましい政治の在り方について考察する。 ・望ましい政治の在り方についてグループで話し合い、お互いの意見や考えを共有する。 ・個人で学習を振り返り、望ましい政治の在り方についての自分の意見をまとめる。 	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ●デジタル端末を用いて、自ら情報収集の方法を選択し、問題について調べようとしている。(観察) ●適切な資料から情報を読み取り、まとめている。(デジタルを活用したワークシートの記述) ●事実に基づき、政党政治の課題について考え、記述している。(デジタルを活用したワークシートの記述) ●学習を振り返り、自身の意見や考え方について自己調整しながら望ましい政治の在り方について考えようとしている。(デジタルを活用したワークシートの記述)

第二次 2時間	【第二次のねらい】 選挙制度に関する諸資料から、選挙の意義と、我が国の選挙制度の特徴や課題についてまとめるとともに、参政権をもつ主権者としての政治参加の在り方について考察させる。				
	【第二次の問い】 望ましい選挙の在り方とはどのようなものだろうか。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・時事問題として、公職選挙法の改正が議論されたことに触れながら民主政治における選挙の意義について、既習事項を踏まえて整理し、まとめる。 ・国政選挙のしくみである選挙区制と比例代表制について、関連資料を基にその特徴と課題をまとめる。 ・投票率の低下や政治的無関心など、現行の選挙における課題について確認する。 ・公職選挙法上のルールについて確認し、参政権をもつ主権者として、自分自身がどのように選挙権を行使すべきかについて考察する。 	○	●	○	<ul style="list-style-type: none"> ○ 諸資料から、選挙制度のしくみと課題について適切に読み取り、まとめている。(デジタルを活用したワークシートの記述) ● 主権者としての在り方について主体的に考えようとしている。(デジタルを活用したワークシートの記述)
第三次 2時間 (本時は、5時間目)	【第三次のねらい】 市民としての政治参加の在り方について、多面的・多角的に考察しながら、自分自身ができる具体的な行動について構想させる。また、単元の学習を振り返らせる。				
	【第三次の問い】 主権者としての政治参加の在り方とはどのようなものだろうか。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・政治組織以外に、政治や行政に影響を与える主体にはどのようなものがあるのかについてまとめる。 ・自分の身の回りで感じる地域の課題を取り上げ、その課題を社会的な見方・考え方(幸福・正義・公正・効率・平等など)で捉える。 ・自分自身が「地域課題を解決する市民団体」を立ち上げたとした場合に、どのような課題について、どのような手段で解決する団体が考えられるのか、構想する。 ・単元全体の学習を振り返り、学習の前と後でどのような気づきがあったのかについて記述する。 ・「社会参画に関するアンケート」を実施する。 	○	●	○	<ul style="list-style-type: none"> ● 事実に基づき、概念を活用しながら、自ら設定した課題について多面的・多角的に考察している。(デジタルを活用したワークシートの記述) ○ 自ら課題を設定し、その課題の解決に向けた取組を構想し、他者に説明している。(観察・デジタルを活用したワークシートの記述) ○ 粘り強く主体的に社会参画しようとしている。(デジタルを活用した振り返りシートの分析)

(5) 本時 (全6時間中5時間目)

ア 本時の目標

事実を基に、社会の在り方に関わる概念を活用し、地域課題について多面的・多角的に考察できるようになる。

イ 本時の展開

○「評定に用いる評価」 ●「学習改善につなげる評価」

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法等)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標について提示する。 ・問い:「政治を動かすのは政治家だけなのか」について、その答えを個人で考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スライドを用いて本日の内容や目標を提示し授業の見通しを立てさせる。 	
展開① 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・過去に政治に影響を与えた主体や現在も影響を及ぼしている主体に関連する情報について、教科書、資料集、デジタル端末等を活用して収集し、まとめたものをペアまたはグループで共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人で情報を調べ、ワークシートを用いてまとめさせる。 	
展開② 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥取県立高校1年生(当時)による市議会に対する陳情例や高校生によるSDGsの啓発活動について確認する。 ・自分自身及び身近な人の経験に基づいて、現在の世界・日本・地域等において課題だと感じる事柄について書き出し、設定した課題を社会の在り方に関わる概念を踏まえて考察し、記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生の団体については、報道番組に取り上げられた際の動画を活用する。 ・社会の在り方に関わる概念について補足する。(幸福・正義・公正・効率・平等など) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 事実に基づき、概念を活用しながら、自ら設定した課題について多面的・多角的に考察している。(デジタルを活用したワークシートの記述)
展開③ 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・3~4人のグループをつくり、設定した課題をお互いに説明する。また、社会の在り方の概念の活用が適切に行われているか相互評価し、相手にフィードバックする。 ・グループワークを通じて気付いたことに基づいて、再度自分の課題について考察させる。 ・自分自身が挙げた課題の中から一つ選び、デジタルツールを使ってその内容をクラス 	<ul style="list-style-type: none"> ・概念を適切に用いているかなどに着目して、一人一人の説明について評価することを伝える。 ・自分と同様の課題を取り上げた人がいないか、また他者はその課題をどのような概念で捉えている 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自ら課題を設定し、その課題の解決に向けた取組を構想し、他者に説明している。(観察・デジタルを活用したワークシートの記述)

	全体に共有する。その中で無作為に課題を取り上げ、その内容を説明させる。	かについて着目させる。	
まとめ 5分	・取り上げた課題を解決するにはどのような方法が考えられるかについて、仮説を考える。	・次回の授業で、取り上げた課題の解決策について構想することを伝える。	

(6) 単元の振り返り

ア 検証結果～ルーブリックによる評価の分析～

評価規準 (n=150)	A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
公正に判断している	33人 (22%)	110人 (73%)	7人 (5%)
当事者意識をもつ等	78人 (52%)	69人 (46%)	3人 (2%)
社会をより良くする態度	121人 (80%)	28人 (19%)	1人 (1%)

※ 評価規準及び評価規準の項目については、「IV 研究の方法 2 検証方法」を参照

イ 成果

検証結果では、公正に判断しているとする評価において、おおむね満足できる以上が95%であった。自ら課題を設定し、その課題の原因や背景を調査・分析して解決策を構想する学習活動において、概念や理論を活用した見方・考え方をより重視した。設定した課題を一面的な現象として捉えるのではなく、課題の構造を深く考察することができ、公正な解決策を構想することにつながったと言える。

また、本時は、仮説1及び研究方法1を踏まえ、生徒一人一人の過去の経験に基づき、日々の生活の中で感じる身近な社会課題から主題を自ら設定し、幸福・正義・公正・効率・平等などといった概念を活用してその課題を考察する場面を取り入れた。ワークシートには次のような記述が見られた。

○ワークシートに見られた記述（例）

- ・課題：「大学教育を受けられない子供がいる」→問題：「自由主義経済における公正な機会の確保の問題」→解決策：「奨学金制度の拡充や所得向上を実現するための財政政策の在り方を提言し、自分自身がNPO団体を作って政治に働きかける」
- ・課題：「所得向上のために減税政策を打ち出せるか」→問題：「税収が減る代わりに国債発行が増加する」→解決策：「将来世代に負担が残る可能性があるなど、公正な解決策を模索する必要がある」

統合型学習支援サービスを活用して、自ら設定した課題を他者と共有させることで、生徒自身が他の生徒から新たな発見や気づきを得ていたものと考えられる。

ウ 課題

身近な社会課題について、自らの経験に基づいて設定させたため、様々な次元の課題が挙げられた。例えば、「たばこのポイ捨て問題」を挙げる生徒がいたが、ポイ捨てを個人的な要因として罰則を強化すればよいという解決策を根拠なく構想してしまうなど、生活に密接な内容であればあるほどそれらの問題を概念や理論を活用して考察することができず、公共や政治・経済の授業で学んできたことを十分に活用できない生徒も見られた。一方で、極端に大きな社会問題に関しては解決策の仮説を考えるに至らず諦めてしまう生徒もいた。

生徒の興味・関心等に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、生徒自身の学習が最適となるよう調整する必要がある。

VII 研究の成果

表1、2、3は、それぞれ、実践事例Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの高校におけるアンケート集計結果のうち、「そう思う」及び「どちらかといえばそう思う」の数値を、事前と事後を比較して示したものである。

表1 (実践事例Ⅰ) 「社会参画に関するアンケート」集計結果のうち、「そう思う」及び「どちらかといえばそう思う」の割合の変化

意欲	社会と関わりたい	事前	77.2%
		事後	68.9%
	社会参画に興味がある	事前	66.0%
		事後	62.1%
	自分は、未来の社会をかたち作る責任を強く感じる	事前	51.5%
		事後	51.9%
効力感	人の役に立ちたい	事前	88.8%
		事後	84.5%
	高校生でも社会をよくしていけると思う	事前	69.9%
		事後	73.8%
	地域住民の意識が社会をよくしていけると思う	事前	83.0%
		事後	82.0%

事前：n=206 事後：n=206

表2 (実践事例Ⅱ) 「社会参画に関するアンケート」集計結果のうち、「そう思う」及び「どちらかといえばそう思う」の割合の変化

意欲	社会と関わりたい	事前	20.0%
		事後	35.7%
	社会参画に興味がある	事前	26.7%
		事後	14.3%
	自分は、未来の社会をかたち作る責任を強く感じる	事前	20.0%
		事後	28.6%
効力感	人の役に立ちたい	事前	60.0%
		事後	50.0%
	高校生でも社会をよくしていけると思う	事前	60.0%
		事後	35.7%
	地域住民の意識が社会をよくしていけると思う	事前	80.0%
		事後	50.0%

事前：n=15 事後：n=14

表3 (実践事例Ⅲ) 「社会参画に関するアンケート」集計結果のうち、「そう思う」及び「どちらかといえばそう思う」の割合の変化

意欲	社会と関わりたい	事前	83.3%
		事後	88.5%
	社会参画に興味がある	事前	70.3%
		事後	82.8%
	自分は、未来の社会をかたち作る責任を強く感じる	事前	52.9%
		事後	69.7%
効力感	人の役に立ちたい	事前	88.4%
		事後	91.8%
	高校生でも社会をよくしていけると思う	事前	67.4%
		事後	77.0%
	地域住民の意識が社会をよくしていけると思う	事前	88.4%
		事後	89.3%

事前：n=138 事後：n=122

実践事例Ⅰについて、表1では、事前、事後の変化はあまり見られなかったものの、ワークシート等の成果物の評価から社会参画に対して肯定的評価が示されている。前述のとおり、実践事例Ⅰでは、抽象度の高いテーマであったが、現代の諸課題に対して当事者意識をもち、創造力を働かせる場面を設定することにより、説明・議論する力や対立やジレンマに折り合いをつける力の育成につながった。実践事例Ⅱでは、表2は期待された結果には届かなかった。しかし、ループリックによる評価の分析では、努力を要する生徒はおらず全ての生徒の資質・能力を育成するという点においては、成果が出たと言える。実践事例Ⅲは、表3においてどの項目も事前よりも事後に肯定的評価の割合が上昇していることから、研究主題に即した授業改善がなされたことがアンケート結果から裏付けられた。実践事例Ⅲは、実践事例Ⅰとは対照的に、生徒の経験や日常生活における身近な社会課題を扱ったことが奏功し、生徒は十分な実感をもって社会参画への意識を高めたものと考えられる。

本研究では、全ての実践事例において、生徒のそれまでの経験や学習到達度に応じて、社会的な見方・考え方を働かせながら事実を基に概念などを活用したり、現代の諸課題の解決に向けて対話や議論をしたりする場面を設定した。授業中の生徒の取組状況や成果物から「個別最適な学び」や「協働的な学び」は、社会参画しようとする態度を育成する授業において効果的であると言える。このことから、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させていくことにより、より一層社会参画しようとする態度を育成する授業改善へとつながるのではないかと考える。

Ⅷ 今後の課題

社会への自己効力感を向上させる学習活動を行うためには、活動で扱う主題の設定が大きく影響する。特に、地球規模の課題や人権問題に関わる場合は、その課題の重要性については学習を通じて認識できるものの、具体的な解決策を想像させることが難しく、自己効力感を向上させる効果は限定されてしまう。個人から社会、世界、地球へと同心円にグローバルに広がるような主題設定を行う授業改善が必要である。また、創造力を働かせる場面を設定する際には、社会における現代の諸課題について繰り返し考察する機会を設定することも課題と言える。

生徒個人がもつ自己肯定感や自己効力感の差異も、社会参画しようとする態度を育成する際に、影響を及ぼすことが伺えた。学校におけるあらゆる教育活動において、生徒個人の自己肯定感や自己効力感を向上していく必要がある。

令和6年度 教育研究員名簿

高等学校・公民

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立世田谷泉高等学校	主任教諭	佐々木 啓 真
東京都立豊多摩高等学校	主任教諭	井 波 祐 二
東京都立田園調布高等学校	主幹教諭	宮 崎 三喜男
東京都立小川高等学校	教 諭	別 木 萌 果
東京都立東久留米総合高等学校	教 諭	◎水 野 雄 人

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 海洲 安希央

令和6年度
教育研究員研究報告書
高等学校・公民

令和7年3月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849